

## 漂う暗雲

八月三日、慎太郎はレジデンスのホールを歩いていて、口笛を吹きながら上機嫌で歩いているイブラヒムを見かけた。

「イブラヒム」

慎太郎が声を掛けると、イブラヒムは慎太郎の方を振り向き、慎太郎と判ると満面に笑みを湛えた。

「やあ、シントロウ、久し振り。変わりはないよ」

イブラヒムの声は弾んでいた。

「うん、変わりはないよ。ところで、イブラヒムは口笛なんか吹いちゃって随分と楽しそうだね。また、先物でも儲けたのかい」

慎太郎がそう言うとイブラヒムは喜びを抑え切れなくてとうとうと喋り始めた。

「うん、そうだね。凶星だよ。実は相場が当たって大金が転がり込んだんだ」、

「特に昨日のNYMEX先物市場は凄かった。王位継承を巡る内紛なんてサウジに住んでいるとまるで実感が湧(わ)かないんだけど、これが主な要因となってあそこまで価格が上がってしまったんだから・・・」

「上手いことここで売り抜けたのでこの一カ月半で大儲けが出来た。五月一九日に五〇・二ドルで買った九月ものを八月二日に六三・八九ドルで売り抜けたのだから一バレル当り一一・六八ドルの儲けになった。先月二日に五四・一三ドルで大量に買った九月ものなんかは僅か二日後の二日には六三・八九ドルと一〇ドル弱も上がってしまった。取引の最低単位が一枚一〇〇〇バレルだから、最低単位でそれぞれ一万三六八〇ドル(約一六〇万円)、一万ドルの儲けということになる。僕の場合は、普通でその一〇倍、時には一〇〇倍、稀に一〇〇〇倍(約一六億円)の儲けと言ったところだね。まあ、先月二日に買った内の大部分は、まだ、来月まで様子を見るつもりだけどね。それに、慎太郎も知っているだろうけど先物取引では取引金額の一〇分の一以下の証拠金を用意すれば取引が可能なので思い切れば手持ち資金を大幅

に上回る取引も可能なのさ」

イブラヒムのこのような儲け話を聞くと慎太郎は友人として嬉しいし凄いいことだとも思ったが、植木ではないがお陰で世界中の人々が結果的に高い石油製品を買うはめになるという不公正さ不当さも感じざるを得なかった。しかし、そんなことは言うわけには行かない。

「それは良かったね。凄いいじゃないか」

「有難う。今度落ち着いたら、ミスター・ウエキと一緒にインターコンチネンタルホテルでご馳走してあげるよ。今日はちょっと忙しいので、これで失礼するけど・・・じゃあね」

イブラヒムは一方的に自慢話を終えるとそそくさとレジデンスを後にした。

既に、八月一日にはサード新国王が直ちに勅令を出して現閣僚はすべて留任と表明していたので、慎太郎はその時点で石渡に電話を入れてアリ石油相の留任を連絡しておいた。その後サウド前国王の葬儀、各国からの弔問、サード新国王の

主要都市への歴訪など重要な行事が続いたのでアリ石油相への訪問を控えていたが、あまり遅くなっではいけないと思い八月一五日には祝いに石油相を訪問することにした。

アリ石油相は祝いに訪れた慎太郎を上機嫌で迎えた。

「やあ、ミスター・イケナミ、しばらく。良く来たね」

そういうと、いつもの通りアリはアラブ式にまず慎太郎の左頬に自分の左頬を付けながら抱擁し、次に右頬に右頬をつけ抱擁した。

「閣下、この度はご留任おめでとつございました」

と慎太郎が言つとアリの顔からは満面の笑みがこぼれた。

「早速に有難う、まあ、座りたまえ。今日は、ゆっくりして  
いってくれ」

アリの留任は、そうなって見れば当然のことと思われたが懸念材料が無かったわけではなかった。サウジでは一九九二年にサウド前国王が特例を除き同一閣僚ポストに五年以上在任させないとの勅令を発していたのだ。アリは既にこの特

例を一度クリアして在任期間が一〇年間となっていること、また、アリの年齢が七〇歳とかなりの高齢であることからすればそれほど容易なことではなかった。これでサード国王からの信任が相当に厚いことが改めて証明されたことになった。

「東京の石渡も閣下のご留任をことのほか喜んでおりました。くれぐれも宜しくと言っておりました」

「そうか、ミスター・イシワタリからも連絡があったか。そう言えば、貴社から祝電が入っていたようだ。宜しく言うておいてくれ」

「畏まりました。それでは、石渡にその旨伝えさせて頂きます。有難うございました」

そこに、ドイツの盛られた皿を持った給仕と右手にアラビアン・コーヒーの入ったアラビアのポット、左手に猪口のように小さい湯呑みを持った給仕が入って来た。

一人の給仕はまず慎太郎にドイツを進めた。ドイツは今まで

見たことのない、皮が黒く光った、いつものようなベトベトとしたものではなくさらっとしたものだった。慎太郎は、楊枝(ようじ)をとると、デーツを一つ刺し手にとった。その給仕はニコツと笑うと、次にアリのところへとデーツを持っていった。続いて、もう一人の給仕が二つ重なった湯呑みを慎太郎に指し出した。慎太郎がその一つを手にとると給仕はそれにコーヒートを注いだ。芳しいコーヒートの香りが漂った。

「今日は、ミスター・イケナミのために最上級のメディナのデーツを用意しておいた。これは、ムハンマドが好んで食べたそうで健康には極めて良い。ムハンマドはこれと水があれば何も要らなかつたらしい」

慎太郎は、アリの勧めるままにデーツを一口かじり、コーヒートを啜った。

このメディナのデーツはこれまで食べた中で最高の味だった。

アリモデーツをかじりコーヒートを啜った。アリはその満足げな顔を慎太郎の方に向けると、デーツの説明を始めた。

「デーツは、でんぷんはもちろん、タンパク質、ミネラル、ビタミン、カルシウムなどを含んでいる。従って、貧血、鳥目に良いしガン抑制効果もあるらしい。サウジはデーツの生産国で国内には一三〇〇万本の椰子の木がある。サウジ人はデーツが好きで一人当り年間二十キログラム程度を食べると言われているが輸出もしている。輸出先は周辺のイスラム諸国だけではなく欧州も入る」

サウジ人がいかにデーツに親しみを感じているとしても、慎太郎はこの間の香木もそうだったがアリの関心の広さ、深さ、博識には驚かされた。

「閣下は何でも良くご存知ですね。お蔭様で勉強になりました。いつも何気なくデーツを食べていましたが、これでちょっと見る目が変わりました。有難うございました」

慎太郎はそう言いながらデーツをもう一度じっくりと眺めてもう一口頬張った。アリはますます上機嫌になっていた。

「そうそう、ミスター・イケナミ、そう言えば、ミスター・イシワタリがリヤドに来た時、中国での我が国と貴国との協

カプロジェクトのことを言っていたが、大変有意義なことだ  
と知っている。その話をサウジアラムコ、ミニスター・ハヤ  
シ(林公使)も入れて進めてくれないか」

アリはサラリとそう言ったが、慎太郎はそれを聞いて自分  
の耳を疑いたくなるほど嬉しかった。天にも昇る心地だった。  
これでプロジェクトKは実現することになる。

「閣下、有難うございます。それでは、早速お話を進めさせ  
て頂きます。細かいことは石渡と連絡をとりまして、当方と  
貴省それにサウジアラムコさんとの間で詰めさせて頂きま  
す。勿論、林公使とも連絡をとらせて頂きます」

慎太郎は、感極まって思わずアリの手をきつく握り締めた。  
アリはその慎太郎の姿をにこやかに見つめていた。

慎太郎は、アリがどうして民間のプロジェクトなのに林公  
使の名前を出したのだろうかと一瞬訝しく思ったが、その時  
はそれをあまり深く考えてはいなかった。

後にこれが大変意味のある発言であったことが明らかと  
なる。この時は林と一緒にパーティーに招かれたせいだろう  
くらいにしか思っていなかった。



慎太郎は、リヤド支店に戻ると、早速、東京に電話を入れて石渡にアリの言葉を伝えた。石渡は「でかしたでかした」と何度も繰り返し慎太郎の労をねぎらった。

プロジェクトKの詳細を詰めるにはそれほど時間は掛からなかった。

サウジは完全なトップダウンで、石油省関係者、サウジアラムコに話は迅速に伝わっていて、慎太郎はアルコール支店の南と連絡をとりサウジアラムコを訪問すれば良かった。善は急げとばかりに翌一六日にはダハランへと飛ぶことにした。

ダハランでは南の助けもあって全てとん拍子に話は進んだ。

そこから南の日頃の仕事振りが良く窺えた。彼は原油、石油製品の取引で常にサウジアラムコに出向いていたから彼のカウンターパートも快く側面から支援をしてくれた。

このプロジェクトは、中国に日量三〇万バレルの製油所を

建設しようとするもので、中国国営石油会社、サウジアラムコ、それに三友商事がそれぞれ三分の一づつの權益を持つことになっていた。原油は全量サウジ原油を使用する。三友商事の原油、石油製品の取扱高は日量約九〇万バレルだったから、これにより一〇〇万バレルの大台に乗ることになる。しかも、自分の製油所から生産する自前玉(自社生産の石油製品)だから、安定性、収益にはより大きく貢献することになる。

中国側とは、既に三友商事上海支店が根回しをしていて、その交渉結果は全て南のところに連絡が入っていた。この辺りは三友商事の得意とするところで、サウジアラムコも南の報告を受け、その交渉振りには舌を巻いていた。中国においては合弁製油所建設に関する權益のパターンは、通常、中国が半分、外国が半分だったから今回のパターンは破格の条件と言えた。サウジアラムコからは、今後、他の中国プロジェクトでも相談に乗って貰いたいと冗談が飛び出すほどだった。因みに、福建省での製油所拡張計画では、中国国営石油会社が五〇%、サウジアラムコが二五%、エクソンモービル

が二五%となっている。

サウジの治安情勢も、新国王の就任以来、一段と落ち着きを見せていた。

八月中旬、サウジ内務省はテロ掃討作戦によりテロリストの数を大幅に削減することに成功したと発表していた。

さらに、治安部隊が八月一日にメディナで最重要指名手配者リスト中のテロリストを射殺することに成功した。

これにより最重要指名手配者はナセルを残すのみとなった。サウジ内務省はナセルが国内にいることには気が付かないで、ナセルは既に海外に逃亡したとして、これで実質的には全員を殺害ないし逮捕したことになったと発表した。

これは慎太郎の予想した通りの進展だった。ただ、六月末に追加的に発表された新指名手配者リスト中のテロリストの多数が未だ残っているので慎太郎はまだまだ気を緩めるわけにはいかなかった。

サウジの国王継承に伴う不安をバネにして上昇した原油価格は、その後、カトリーナとリタの二つのハリケーンが米国メキシコ湾岸の石油施設を直撃して八月三〇日には史上最高値の六九・ハードルへと高騰していた。

慎太郎は、八月には喜色満面のイブラヒムを何度も見かけることになった。

慎太郎も、プロジェクトK、サウジの治安情勢など全てが良い方向に行って心も晴れやかに日本に戻れるものと思っていた。

しかし、そのような良い状態はそれほど長続きはしなかった。

急転直下、悪い出来事が続くことになる。

まず、八月下旬に、石渡とプロジェクトの最終確認を終えた後に石渡から思いも寄らない訃報を聞いた。

慎太郎が昨年一一月に帰国した時に六本木村で「イケレンス」と言っつて慎太郎を励ましてくれた中田が、昨日すい臓ガんでこの世を去ったと聞かされた。

石渡は中田とじっ懇だったからそのショックで声が沈んでいた。

池波君は、サウジアラビアに行っているんだろう。アラビアと言えばアラビアのロレンスじゃないか。池波とロレンスでイケレンスと言っわけだ

慎太郎の耳には未だに六本木で聞いた中田の音が鮮明に残っていた。

慎太郎は、マイクを片手に体を左右に揺らせながら「北の酒場」を歌っていた中田の姿も昨日のことのように鮮明に思い出していた。

「いのち温（ぬく）めて 酔いながら 酒をまわし飲

む・・・」

中田の歌声がすぐそこから聞こえてくるようだった。

あの元気そうだった中田がたったの九カ月後にはもうこの世にいない。慎太郎はこの世は誠に儚(はかな)いもの空しいものをつくづく思いしらされた。

次の出来事は九月に入って直ぐのことだった。

慎太郎のレジデンスに急にイブラヒムから電話が入った。時間があれば美味しいアッサム茶を飲みに来ないかということだった。マグレブとイッシヤーのお祈りの短い間だったから慎太郎は気楽に行ってみることにした。通常、この間に食事に招待されるようなことは無く時間はかからない筈だった。

慎太郎は、イブラヒムのレジデンスの呼び鈴を押した。中からイブラヒムの声が聞え玄関のドアが開いた。そこにイブラヒムが笑顔で立っていた。

「アツサラーム・アレイコム」

「アレイコム・サラーム」

「やあ、慎太郎。突然呼んで悪かったね。紹介したい人がいるんだ」

「そう、有り難う。誰」

「まあ、中に入って。どうぞ、どうぞ」

中に入ると、窓際の大きなソファに、小太りの体格の良い男が座っていた。一目見て、相当に位の高い人間であることがわかった。ただ、色白で目鼻立ちのくっきりしたナジド出身のサウジ人とは異なっていた。綺麗に日焼けしたせいもあるのだろうが、白人と混血の黒人のような顔立ちだった。愛嬌のあるその丸い大きな鼻と顔でニヤリと笑うと誰もが引き込まれそうな魅力があった。そして何とも言えないオーラを周囲に放っていた。

「殿下、こちらが今お話した三友商事のミスター・イケナミです」

イブラヒムは言った。殿下、まさかアブドルアジズ殿下ではないのだろうか。と慎太郎は思った。

「池波です。初めまして」

「初めまして、アブドルアジズです」

イブラヒムも人が悪い。それならそうと最初から言っておいてくれれば良いのと思った。しかし、もう遅かった。

「殿下が是非と仰ったものだから・・・」

「殿下、お会いできて光栄です」

慎太郎は、極度に緊張しながら挨拶をし直した。

「急に済まんね。私は日本には興味があつてね。特に、三友重工の高い技術力には昔から感心していた。プロジェクトを頼めば必ず期日通りに完成してくれた。いろいろな面で信頼出来る、」

「私は、若い時に戦闘機に乗ったこともある。だから、メカが好きだ。その内にハイテクの日本にも行ってみたいと思っ  
ているくらいだ」

「殿下、有り難うございます。是非、一度日本に行ってみて下さい。そしてハイテク技術をみて頂くのも良いですが古い



日本の都にも行ってみて下さい。良いところが沢山あります。お寺などでは香木を焚いたりしていますからお楽しみ頂けるのではないかと思います」

慎太郎はアブドルアジズの気を引こうと強引に話題をサウジ人の好きそうな香木の話にもっていった。あるいはまずいことをしてしまったかも知れないとも思ったが、アブドルアジズは大物らしく全く構う風でもなく香木について話を始めた。

「ほ、君は香木のことを知っているのか。サウジでは、絶対に無ければいけないものだ。私の家でも毎日香木は焚いている。ただ、香木はそんなに多くは焚かない。普通はマーモールという木切れを香料などで丸く塗り固めたものを焚いている」

アブドルアジズが話題に乗って来てくれたので慎太郎はホッとした。

それどころか、さらに、香木の話が続いた。

「私の家ではマーモールをこの近くのアル・コザマ・センタ―にある香水屋から買っている」

アル・コザマ・センターには香水屋は一軒しかない。この香水屋とはハッサンの店のことだ。思いも寄らずアブドルアジズからハッサンの店の話が出たのが嬉しくて堪らなかった。そう言えばハッサンは彼の家がアブドルアジズ大王の香水師だと言っていた。ハイル家御用でもおかしくは無かった。

「殿下、あのハッサンのお店ですね」

「そうだ、君はハッサンを知っているのかね。それは奇遇だ。彼は昔から我が家に入り出している。面白い男だ。それに実に器用で彼には不釣り合いほどの美人をレバノンから見つけてきて妻にしている。誠に運の良い男だ。仲良くしてやってくれ」

アブドルアジズは愉快そうに言った。

「幸い、仲良くしてもらっております」

慎太郎はアブドルアジズと愉快に話を始めることが出来た自分についていると思った。たまたまハッサンと知り合いになっていたことを感謝していた。

アブドルアジズも上機嫌だった。

イスマイルも楽しそうに話す二人を見て安心していた。

ところが、アブドルアジズの関心を買うに違いないと思っ  
て出した名前がその意に反してアブドルアジズの機嫌を損  
ねてしまうことになる。

スルタンの紹介で知り合いになったシェイク・ムトラック  
はテレビに出るほど著名なイマームだったし、これまでその  
名前を出すと皆知り合いであることを羨ましがったので、慎  
太郎はその名前を気楽に出した。

ところが言った途端にその場の雰囲気はがらりと変わっ  
た。

アブドルアジズの暴君らしいきまぐれなところが顔を覗  
かせた。こうなるともう止まらない。

アブドルアジズの語気が急に荒くなった。

「一体どうして君はあのムトラックと親しくしているのか。  
ムトラックは有名なイマームで人々から尊敬されてはいる  
が危険思想を持った人物だ。どうして君はムトラックと知り  
合いになったんだ」

慎太郎はムトラックにそのような危険なところがあると全く知らなかった。アブドルアジズは名前を聞くのも不愉快のようだった。

とにかくアブドルアジズは凄い剣幕になった。

イブラヒムの顔色が変わった。

慎太郎は思いも掛けないアブドルアジズの反応に驚いていた。しまったと思ってもどうしようもない。

そして少しでも機嫌を直すためにスルタンの紹介だったことを正直に言うことにした。

慎太郎は、スルタンがジャマル家のために、対峙するアブドルアジズと王位継承問題について交渉を行っていたの思い出してはいたが、交渉の内容について詳しくは知らなかったし、ともかくプリンスと関係の深いスルタンの名前を正直に出すことが悪い筈はないと思ったからだ。

「なに、君はシェイク・スルタンと親しくしているのか。

あのアルバハの・・・」

アブドルアジズは声を一層荒げた。

「・・・・・・・・」

「彼の思想も偏向している」

アブドルアジズは吐き捨てるように言った。その素振りからスルタンに対して相当の遺恨があることが判った。

アブドルアジズの顔は一段と険しくなった。

慎太郎は、ちょっと間をおいて、これも機嫌を直すことになるのではないかと思つて、三友商事がアリ石油相にも協力してもらつてサウジのために大きなプロジェクトを進めていることを話してみた。

しかし、アブドルアジズの機嫌は戻らなかつたばかりか、却つて悪い方向に行つてしまった。悪い回りになると全て悪くなるものだ。

「君、大臣といつても何でも自分で決められるわけではない

ぞ。あのヤマニでさえ我々に疎まれたらお終いだった。アリは優秀なテクノクラートだし仕事が出来るからサード国王も重用している。我々も十分に評価してはいる、」  
「だが、今度、そのプロジェクトがどんなものか調べてみることにしよう」

筋金入りの外交官らしくアブドルアジズの様子は既に元に戻ってはいたが、その言葉の端々に不愉快さが漲っていた。

イブラヒムは思わぬ展開に肝を冷やしていた。

幸い、イツシャーのお祈りが近づいて来ていたので話をそこで終えざるを得なかった。

アブドルアジズの頭の中には、慎太郎とスルタン、慎太郎とイブラヒムの関係が明確に刻み込まれていた。

アブドルアジズが帰った後イブラヒムは途方にくれていた。  
た。

「シントロウ、もともとはアブドルアジズ殿下が僕を仲介者として君の会社に自分の原油(プリンス・クルード)を直接好条件で売りたいかったらしい。あの方は力があるし何でも器用

だからね」

「そうか、有り難う。でも、その件なら、うちはアラムコから原油を直接購入しているから殿下に新たにお願いすることはないよ」

慎太郎は正直にそう言った。

イブラヒムは、焦燥(しょうそう)しようにしきっていた。イブラヒムはアブドルアジズとの長い付き合いで、その機嫌を損ねた場合どうなるかは良く判っていた。そして慎太郎にしんみりと話を始めた。

「慎太郎、これで僕もお終いかもしれない。これまで、成功を収めてきたつもりだったが……」

「実は、僕は、インド南部の貧しい階層の出身だったんだ。これまで黙っていたけど苦勞の連続だった。その日に食べるものも無いこともあったほどだ」

「モスLEMになったのも、ヒンズーと違ってモスLEMは皆平等だからだよ。ヒンズーだとカースト制度に縛られてしまう。その世界では名前を聞くだけで所属する階層がわかり生涯

その階層を超えることは出来ない。中には下位の階層の美しく優秀な女性が上位の階層の男性から見初められるようなこともあるが、これは大変な悲劇を生むこともある」、

「例えば、僕の友達だった女医さんがそのケースだった。嫁いだ先からいろいろ要求されて、彼女の父親は必死で全財産を売ってまでその要求に応えていた。しかし、新車が欲しいという最後の請求には応えることが出来なかった。父親は娘に謝ったがどうにもならなかった」、

「結局、彼女は思い余って自殺してしまった・・・」

慎太郎は、イブラヒムの内訳話を聞いてどう応えて上げればよいのか思い付かなかった。

また、アブドルアジズの機嫌を損ねたようだったが、慎太郎はたかをくくっていた。イブラヒムは、これまで、随分とアブドルアジズに貢献して来ているではないか。イブラヒムの取り越し苦労だと思っていた。

しかし、イブラヒムは気紛れな権力者の心の流れを正確に捉えていた。



やがてイブラヒムの懸念は的中する。

一月中旬、イブラヒムの身に突然悲劇が訪れた。

慎太郎がレジデンスに戻ると、玄関の前に警察の車が数台止まっていて受付の周りには黒山の人集(ひとだか)りが出ていた。

受付のアハマドに何事が起こったのかと聞いたところイブラヒムが警察に逮捕されるとの答えが返ってきた。あれほど石油取引で大儲けをして喜んでいたイブラヒムが急にこのような奈落(ならく)の底に落ちてしまう。実に恐ろしい。

アハマドは慎太郎に囁(ささや)いた。

「イブラヒムは、怪しげな魔術師を通じて麻薬取引に係わっていたらしいですよ」

「ええっ」

と慎太郎は絶句した。慎太郎にはとても信じられなかった。

そこに、手錠をはめられたイブラヒムが数人の警察官に連れられて来た。

イブラヒムは虚ろな目をしていたが、人だかりの中に慎太郎を見つけると一瞬いつもの輝きが戻り何か訴えるような表情をした。慎太郎には、その目が無実を訴えているかのようには思えた。

しかし、すぐに無表情となり慎太郎から目を反らした。そして、まっすぐに前を向いて総ガラス張りのドアの方に歩いて行った。警察官達はイブラヒムを車に入れると、あつと言う間にレジデンスから走り去った。慎太郎はただ呆然(ぼうぜん)とその光景を眺めていた。

慎太郎は部屋に戻ると、たった今起きたことを悪夢のように思い出していた。夢なら醒(さ)めて欲しいと切に願った。イブラヒムがいずれ斬首刑になることはほぼ間違い無い。しかも見せしめのために公開処刑となるだろう。この国では麻薬取引に絡むと極刑だ。

このイブラヒムの悲劇を象徴するように、八月三〇日に史

上最高値の六九・八ドルを記録した原油価格は、一〇月三  
日には六〇ドルを割り、その後もさらに低下を続け一一月  
一八日には五六・一四ドルとなっていた。

慎太郎は自分のことが急に心配になってきた。

強い懸念を頂きながらプロジェクトKの最終調整を急が  
ざるを得なくなった。月日は矢のように過ぎた。

植木にも更に辛いことが起きていた。

植木は一一月一九日にリヤドで開催された国際石油・ガス  
フォーラム事務局ビルの開所式で植木が期待していたよう  
な進展が見られなかったと慎太郎に嘆いた。

フォーラム事務局は、そもそもサード・サウジ国王が皇太  
子時代にその設置を提唱したもので、そのためリヤドに本部  
が置かれることになったのだった。サウジ政府の意気込みは  
相当なもので事務局ビルはサウジ政府の全額負担で建てら

れた。用地は、各国大使館、他の国際機関が集中しているD  
Q内に用意されていた。その借地料も一年間でたったの一  
リヤル(三〇円)という名目的なものだった。

新国王の力は圧倒的で、石油省、サウジアラムコは開所式  
を盛大に行うべく全力で準備を始めていた。

主要国からエネルギー閣僚、国際石油会社の代表者をリヤ  
ドに迎えることとなった。ただ、これまで国際会議の準備を  
何回も経験して来た植木からすれば、とても間に合わないの  
ではないかと思われるくらい準備が遅かった。植木は、日本  
政府などからも招待者リスト、式次第などの問い合わせが来  
たがなかなか全貌(ぜんぼう)が掴めずに応えに窮していた。

慎太郎は植木からそれを聞いてサウジらしいと思った。

サウジは、以前もそうだったが、準備が間に合わないの  
ないかと気を揉むほど進み方が遅くても直前になると急に  
動き出し不思議なことになんとか間に合わせてしまう。今回  
も、植木によれば、サウジ政府は直前に事務局周辺の道路舗  
装をして間に合わせたり、作ったばかりの真新しい鉄筋コン  
クリート製の塀の一部を壊して入口を作ったりという芸当

を平気でやってのけたらしい。

後者などは先進国だったら税金の無駄遣いなどとマスコミが騒ぎ立てたことだろう。

植木にしてみれば、フォーラム事務局は人数も少ないし準備は全て石油省、サウジアラムコに任せざるを得なかったの  
でやきもきしてもどうにもならなかった。

植木にはいろいろと不満があった。しかし、一番辛かったのはそのような準備の不透明さ、もどかしさではなくて開所式の際に開催されたセミナーの内容に関することだった。

植木は事務局長からセミナーの内容について意見を聞かれたので、普段から最も問題としていた高原油価格をテーマに入れるよう提案した。しかし、それが全く通らなかった。

高原油価格問題は、既に原油価格が四〇ドルの際に前回アムステルダムにおける国際石油・ガスフォーラムで取り上げられていた。しかも八月初めには原油価格が史上最高値を記録したことから、当然取り上げられるべきものと植木は思っ

ていた。また、高原油価格を糾弾する急先鋒のダス・インド石油・ガス相も参加するし高原油価格問題を取り扱うという植木の提案は充分に説得力があると思っていたのだった。

それだけに植木には挫折感が強かった。

この開所式には、サード新国王を始めとしてアリ石油相、サウジアラムコ会長も参加したことから外国からも賓客が多数参加した。政府代表としては、米国からボドマン・エネルギー長官、英国からブレアー首相の後継として噂されているゴードン・ブラウン財務相が参加し、国際石油会社からはエクソンモービル、シェル、BPの最高経営責任者が参加するなど豪華な顔ぶれだった。

これに対し、日本からは二階堂経済産業相が来られずに太田特使が参加するに止まった。

石油会社としては最大手の日本石油から実力者である渡部会長が出席し、これ以上は望めない対応をした形となったが、国際的に見ると並み居るスーパーメジャーに比べ必ずしも知名度が高いとは言えないのでサウジから最大限の対応

をしたと評価され難いという損な立場だった。

植木は、この時、日本が国際石油・ガスフォーラムに米国、サウジに次いで資金的に貢献しているのに正当に評価されてはいないという悲哀を感じた。

慎太郎は、植木から開所式の話搔い摘んで聞いて植木の嘆きが良く理解出来たが、この開所式が慎太郎のプロジェクトにも暗雲を漂わせるとは思いも寄らなかった。

開所式から一週間後の一月二六日のことだった。

急に慎太郎はアリ石油相から呼び出された。

アリはいつもと変わらない穏やかな表情で慎太郎を迎えた。しっかりと抱擁するアラブ式の歓迎振りもいつも通りだった。慎太郎が、新国王の出席した国際石油・ガスフォーラム事務局の開所式の成功を祝うと満足気に満面の笑みを湛えた。

「お祝いの言葉を有難う。国王陛下も殊の外お喜びだった。特に、英国からゴードン・ブラウン財務相が出席してくれた

ことを高く評価していた。エネルギーの話だけではなく陛下は英国の戦闘機に大変な興味を持っていらっしやう。最新の戦闘機は米国だけではない、このようなものは一国のみ依存するのでは無く幾つかの国に分散して注文するのが良いかもしれないなど仰っていた。勿論、米国のエネルギー―長官の出席も評価していた―

慎太郎は、アリの話を静かに聞いていた。

と、急に、アリは話を止め一瞬顔を曇らせた。そして、言い難そうに口を開いた。

「私は、今回式典は、中国政府及び中国国営石油会社の要人も出席したし陛下に日本政府との重要プロジェクトを紹介するには良いチャンスだと思っていたが、残念ながらそのようなチャンスを逃がしてしまった」

慎太郎は、アリが何のことを言っているのか最初は分からなかった。アリの言っている日本政府との重要プロジェクトが慎太郎の進めているプロジェクトKのことであると気付くまでには少し時間がかかったほどだ。



慎太郎は、そこで今更ながらサウジ政府が民間プロジェクトも政府プロジェクトも見境の付かない傾向のあったことを思い出した。

前回赴任の時、サウジは民間との原油購入契約であるにも係わらず政府との契約と思い込み日本国政府の代表である大使を交渉相手にしたがっていた。しかし、それは無理も無いことだった。サウジは王政で何事も政府主導だったので、相手の国も全てそうだと思い込んでいたのだろう。また、相手国も当時は米国を初めとして例えばギリシャがそうだったが、そのようなサウジのアプローチに好んで官民一体となつて対応している国が多かったからだ。

しかし、その後時代も変わったし、今回はそのような誤解はないものと思っていたので、慎太郎にはこのアリの発言は意外だった。

「今回のプロジェクトの件は、日本大使館の林公使にも事後に連絡させてもらってはいますが、基本的には三友商事のプロジェクトということでご承知頂いているものと思ってお

りました。また、事業の場所が日本でもサウジでもありませんので、日本政府としても深くは係わり難い事業と考えていると思います」

サウジアラムコとの交渉では、これまでのところ、そのような誤解は一切無かった。

「そう言われてみるとシンタロウの言う通りだ。最初に思い違いがあった。今回の件については、私が、勝手に、式典で帰国の経済産業相、日本石油会長、それに中国の代表者の間で一気に話を固めたかったと考えていただけだったのかもしれない。さっき言った戦闘機に関する英国との話が急に陛下の関心を惹いたので、同じように進めば良いと考えたのがいけなかった」

アリは、穏やかな口ぶりだったが、さかんに英国と比べ、今回プロジェクトに対する国王の関心を惹きはぐったことを悔やんでいるようだった。

そして、次にアリの口から信じられないような話が出た。

アリは、慎太郎から視線を逸らしながら一気に喋った。

「実は、開所式の時に中国政府の要人と話をする機会があったが、その時に今回のプロジェクトについて見直しをしたいと行って来てね。あるいは聞いているかもしれないが、他のプロジェクトと同様、中国側が半分の權益を維持したいと言うのだ。我が方としてはいきなりの変更で困惑したが、なにしろ中国での事業だからいかんともし難い。済まんが、至急、石油省、サウジアラムコとプロジェクトの見直しをしてもらいたい」

中国側の突然の変身は慎太郎には寝耳に水だった。押し殺したようなアリの声が続いた。

「そこで、相談だが、その見直しの際には我が国は前の通り三分の一の權益を維持したいと思っているので、その分日本の權益を削って貰いたい。勿論、中国は既にその線で合意している」

アリは中国側の見直しに困惑したと言っていたが、見直しの煽りをまともに食うのは三友商事だった。見直しを認めれば、三友商事の權益が三分の一即ち三三・三%から一六・七%

へとほぼ半減してしまうことになる。

中国の心変わりには、ここのところ一段と盛んになってきた資源ナシヨナリズムの一環かとも思えたが、上海支店からはそのような連絡も入っていなかったし、このような変更が何故このサウジで行われたのか慎太郎には附に落ちなかった。

プロジェクトKの真の目的は、今回の中国における合併事業を足がかりにして、このサウジでアラビア石油の無くした権益に準ずるような権益を取得することにあつたので、この見直しによってその夢の実現が一步遠ざかってしまうことになる。

「閣下、急にそのようなことを聞いて驚いています。早速、本社、アルコバール支店、上海支店と連絡を取りながら、石油省、サウジアラムコと調整させて頂きます」

慎太郎はそう応えざるを得なかった。

「そうか、有難う。是非、宜しく頼むよ。いずれ、今回の償いはさせてもらうからね」

とアリは申し訳なさそうに言うてくれた。心なしか、慎太

郎にはアリが苦渋に満ちた顔をしているように見えた。

慎太郎は、とにかく、今回の急変を本社と調整して出来るだけ早く文書化し署名調印まで持っていかねければならぬい。

この件に限らずいくら好いことを言われても実現するまでは安心出来ないのもこの国の特徴だった。何事も非効率なサウジの中にあつて、慎太郎は最大限の努力を続けて来たつもりだったが、署名調印にまで持っていけなかった自分の詰めの甘さを悔やんでいた。

「ただし、絶対に上海支店を通じて中国政府と再交渉するよ  
うなことはしないでくれ」

とアリは釘をさしたが、慎太郎は上の空でそれを聞いていた。突然の変更にただ呆然としていたのだった。

一体、何があつたというのだ。

本当に、今回の見直しは中国側の心変わりだったのだろうか。それに、アリが言ったように国家プロジェクトに関するサウジ側の誤解、国王の了解を得るための機会の喪失が重なる

ったのだろうか。

アリ石油相の顔は苦渋に満ちていたように見えたが・・・

一瞬、慎太郎の脳裏にはイブラヒムの部屋で会ったアブドルアジズの顔が浮んだ。

しかし、直ぐにアブドルアジズが関与する筈は無い、やはりアリの言ったように中国側の心変わりに違いないのだろうと思ひ直したりして心は揺れ動いていた。

慎太郎は、早速、恐る恐る石渡に電話を入れた。

石渡は、慎太郎からプロジェクト見直しの話を聞いても全く動じなかった。

「そうか、中国政府が心変わりしたか。それなら仕方が無いじゃないか。プロジェクト自体が反古(ほんご)になったわけはないから、今後を考えて、ここは引き下がって考えた方が良いだろう。それに、前の条件は良すぎたしね。アルコバールの南君と連絡してサウジアラムコと再調整してくれたまえ」

慎太郎は胸を撫で下ろした。

そして、石渡の気遣いに思わず涙を流していた。

アルコールの南は見直しの話を聞いて憤慨した。

今度は、慎太郎が石渡のように南の気持ちを宥(なだ)める役に回らざるを得なかった。南は、今回の変更の原因はそのタイミングからして中国側にあるのではなくサウジ側にあるのではないかと推測していた。

南は大分ふて腐れていた。居酒屋があれば一目散に行っつてやけ酒を飲みたいなどと言い出す始末だった。

このように二〇〇五年八月下旬から年末にかけて慎太郎の周辺には暗雲が漂った。